

司式:大谷 昌恵  
奏楽:堀口 恵美

前奏:「汝にこそ喜びあれ」(J.S.バッハ)

招詞:新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。主に向かって歌い、御名をたたえよ。日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。(詩96:1-2)

讚美歌:55「人となりたる神のことは」

罪の告白・赦し

聖霊を求め祈り

朗読聖書①イザヤ書 8:22b-9:6

◆ダビデの位

8:22b 先に/ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが/後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた/異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。

★「ゼブルン(ゼブールン(זְבוּלֹן))=[exalted]地位の高い喜びに満ちた)の地、ナフタリ(נַפְתָּלִי)=[wrestling]格闘する)の地。前 733-722年ティグラテ・ピレセルによって占領され、アッシリア抵抗句の領土に編入された土地、この土地も昔の栄光を取り戻す宣言が為されている。

9:1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見/死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

9:2 あなたは深い喜びと/大きな楽しみをお与えになり/人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように/戦利品を分け合って楽しむように。

9:3 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を/あなたはメディアンの日のように/折ってくださった。

9:4 地を踏み鳴らした兵士の靴/血にまみれた軍服はことごとく/火に投げ込まれ、焼き尽くされた。

9:5 ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神/永遠の父、平和の君」と唱えられる。

9:6 ダビデの王座とその王国に権威は増し/平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって/今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

朗読聖書②マタイによる福音書 4:12-17

◆ガリラヤで伝道を始める

12 イスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。

13 そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まれた。

14 それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、/湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、/異邦人のガリラヤ、

16 暗闇に住む民は大きな光を見、/死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

17 そのときから、イスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

### 祈禱

聖なる主なる神さま、聖名を崇め、賛美致します。

クリスマスの喜びの中で新しい年を迎えました。この一年、どのようなことが私たちを待っているのか私たちには分かりません。しかし、確かなことは、主イエス・キリストが、何時も、どんな時でも、私たちと共にいてくださる、ということです。私たちは、クリスマスの大いなる喜びの知らせを聞きましたが、しかし、今なお、それぞれに、不安や悩みを抱えて生きています。自分の弱さや欠けの多さに気がつきながら、そんな自分に頼り、自分の考えでなんとか解決をしようとして疲れ果てています。主イエス・キリストは、そんな私たちのありのままの姿をご存知で、それでもな

お、私たちと共に歩み、共に生きてくださっていることは、私たちにとって大きな慰めであり、生きる力です。神さま、どのような困難にであっても、あなたが未来を切り開き、前へと進む力を与えてくださっていることを信じ、感謝と喜びとをもって新しい年を歩み続けることができる者としてください。そのために、私たちの信仰を強めてください。

神さま、この一年も、信濃町教会の歩みを祝福し、この場所であなたに献げられる礼拝を豊に祝してください。そして私たちが、この礼拝によって、あなたから与えられる御言葉に力強く押し出され、御言葉を携えて、この世の旅路を歩いていくことのできる者とならせてください。

今日、この礼拝を覚えながらも様々な事情のために、ここに集うことのできない者がおります。ここで開かれる主の晩餐に与ることができず、心痛める者もおります。どうぞそれらの人々にも、ここに居る私たちと同じあなたからのお恵みと祝福とを、お与えくださいますようにと祈ります。そして、いずれまた、共に礼拝に与ることができる時までの日々をお守りください。

今朝は佃 雅之牧師が御言葉の取り次ぎをしてくださいます。新しい年、最初の御言葉を取り次ぐために備えをしてきた佃牧師の上に、あなたが豊かに聖霊を注ぎ、佃牧師が大胆に御言葉を語ることが出来ますようにお支えください。そして聞く私たちの心も整えてください。

今日、日本中、世界中の教会で御前に献げられる礼拝と、そこに集う方々全ての上に、あなたからの豊かな御顧みと、お慰めがありますように。特に、災害被災地にある教会、牧者不在など困難な状況にある教会を覚えて祈ります。また、幼子たちの上に特に大きな祝福をお注ぎください。

この感謝と願いの祈り、私たちの救い主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げを致します。アーメン。

讚美歌:459「飼い主わが主よ」

説教「伝道を始める」

佃 雅之

新しい年を迎え、私たちはこうして再び、主の御前に集められました。主が招き導いてくださった神の恵みのしるしです。神は、主の日ごとの礼拝において、御言葉をもって私たちの歩みを支え、確かなものとしてくださいます。今朝は、新しい年の歩みを始めるにあたり、主イエス・キリストが宣教を開始された場面から、御言葉に耳を傾けたいと思います。

今日の箇所に記載されている「ガリラヤ」は、キリストが伝道の拠点とされ、弟子たちを招かれ、多くの癒しと教えが為された場所です。エルサレムから北へおよそ 100 km、現在のイスラエル北部にあたる地域です。ガリラヤは政治的にも、宗教的にも、文化的にも、中心から外れた場所と見做されていた所です。異邦の文化が入り混じり、秩序が揺らぎ、反乱や社会不安が起り易い地域であったと言われていました。人は、ガリラヤを神の働きが起るはずのない所、救いとは無縁の地だと考えていたようです。しかし、主イエス・キリストは、整えられた場所からではなく、不安と混乱の只中に身を置いて伝道を始められました。私たちにとってガリラヤは、神の子が人として歩まれた場所でありますから聖なる地であります。けれども、「聖地」と呼ばれるその場所は、決して理想郷ではありませんでした。今もなお、イスラエルとパレスチナを巡る情勢は終わりの見えない対立と憎しみの中にあり、戦争と緊張に曝されています。

人間の罪と弱さが否応なく明らかにされる現実があります。なぜ、愛そのものである主イエスが歩まれ、人々を赦し、人々を癒し、共に生きる道を示されたその土地が、今も尚、憎しみと暴力の地であり続けているのでしょうか。この問いは私たちの信仰そのものに向けられた重く深い問いです。イエス・キリストは不安と混乱の中にお生まれになり、人間と同じ苦しみと痛み、十字架に架かり、そして甦られました。神の救いは理想の世界や整えられた場所ではなく、罪と憎しみと暴力に満ちた、この世界の現実へと向けられています。だからこそキリストは、闇の中に身を置かれ、その闇を引き受け、真の光をもたらすために、この世に来てくださいました。そしてキリストは今もなお、憎しみと暴力に引き裂かれた世界の中で、“わたしに従いなさい”と、私たち一人ひとりを招いておられます。

福音書記者マタイは、洗礼者ヨハネが捕らえられた出来事を以て、キリストの伝道が始まったことを記しています。ヨハネが捕らえられたのはガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスが、兄弟の妻を自分の妻としたことを、神の言葉に基づいて律法に反する罪として公に指摘したからです。ヨハネの逮捕は神の正義を語り続けたが故の迫害でした(マタ 14:1-12)。ヨハネはメシアであるイエス・キリストの到来に先立ち、その道を備えるために神から遣わされた最後の預言者でした。“わたしの後から、わたしよりもはるかに偉大な方が来られる”と告げ、“だから、悔い改めよ。向きを変えよ。神の新しい決定的な時が来たのだ”と、人々に呼び掛けたのです(マタ 3:1-12)。

ここで大切なのは、この出来事が、“神の救いの歴史が新しい段階へと進んだことを告げている”という点です。マタイはヨハネの時代が終りイエスの時代が始まった、その決定的な転換点をここに描いています。ヨハネの逮捕も、キリストの伝道の開始も、人の思いや計画によるものではありません。神ご自身が歴史の出来事一つひとつを通して、夫々に託された役割を、時に応じて受け渡して来られたのです。人の目には悲劇としか見えない出来事の中で、神の救いの御業は次の歩みへと進められていきます。

マタイは、この神の計画を告げるために、ここで「ヨハネが捕らえられた(12節)」と記します。この言葉は聖書の中で主イエスの受難を語る時(例えば 27:2「ピラトに引き渡す」、同 26 節「十字架に付けるために引き渡した」など)にも用いられる「渡される」(παράδιδωμι)という表現です。私たちが、この後与る聖餐式の制定の言葉「主イエスが渡される夜、」(1コリ 11:23)に同じ言葉が使われています。ヨハネはキリストに先立って道を供えましたが、その歩みは、「捕らえられる」という出来事においても、主イエスの歩みと深く結びついています。

そしてマタイは続けてこう記します。

「イエスはナザレを離れ、…カファルナウムに来て住まわれた。」

ナザレはキリストの故郷、故郷の町です。キリストはナザレで成長され、およそ30歳になるまで日々の生活を送っておられました。しかしここで、キリストがナザレを離れられたのは何故でしょうか。福音書は、その理由を「ナザレの人々が、イエスを救い主として受け入れることができなかったことにある」と伝えていますが(13:53-58)。主イエスご自身も“預言者は自分の故郷では敬われない”と語られています。さらに「預言者が敬われないのは、その故郷とその家族の中だけである(57節)」とも言われています。ナザレの人々は主イエスをヨセフの子、大工としてよく知っているつもりでいました。私たちは互いをよく知っているという思いから、その人を決めつけ、神がその人を通して新しい御業をされる時、受け入れられないということがあります。そのような人間の心のありようと伝道の厳しさをよくご存知であったキリストは、故郷を

離れ、カファルナウムを活動の拠点とされたのです。

さらに、マタイは、この出来事は“預言者イザヤを通して告げられていたことが成就するためであった(4:14)”と伝えています。

「ゼブルンの地とナフタリの地」はガリラヤ湖の西側に位置する地域です。この地は紀元前8世紀後半、アッシリアによる侵略を受け、暗闇と苦しみを経験した場所でもありました。預言者イザヤは、その地方に生きる人びとを“暗闇に住む民、死の影の地に住む者(イザ9:1)”と表現しています。しかし神は、人が希望を見出せなくなってしまった、そのような地を見捨てはおかれませぬ。預言者イザヤは、“暗闇の中を歩んでいた民は、大いなる光を見た(イザ9:1)”と語りました。その言葉は700年以上の時を経て、キリストが実際にその地に来られ、働きを始めたことによって神の約束が現実となったことを告げるのです。

ヨハネの逮捕という出来事は、人間の暴力と不正があからさまに現れたこの世の闇でした。ヨハネの声は封じられました。しかし、神の声は封じられることはありません。たとえ一人の預言者が沈黙させられたとしても、神の国の宣教は神ご自身によって、確かに前へと進められていくのです。

聖書が語る暗闇、「死の陰」(マタ 4:10)は、何より真の神を知らない霊的な暗さです。それは今の私たちの姿でもあります。私たちは、日々、罪を重ねながら生きています。その罪の故に、知らず知らずの内に闇の中に身を置き、互いにつぶかり合い、傷つけ、また、傷つけられながら歩んでいます。そのような私たちは、まさに、「死の陰の地に住む者」たちであります。また、人は誰も、やがて死を迎えます。その意味で私たちの人生は常に、死の陰の下にあるのです。普段はそれを見ないようにしていても、年齢を重ねる中で、あるいは病を通してその陰は次第に濃くなり、不安と恐れの中を歩むこととなります。若く元気な人であっても、ある日、突然、自分自身や家族、友人の生活が死の陰に覆われてしまうこともあります。罪の闇と死の陰の下にある、それは全ての人に共通する現実です。そのような、私たちの只中に、キリストという光が差し込み、私たちの心を照らしてください。真の光、命の光に照らされた者として、私たちはどのように生きることが求められているのでしょうか。

教会の使命は“キリストの福音を宣べ伝える”ことにあります。主は、伝道のために私たち一人ひとりを用いてくださるお方です。特別な人だけが献身者なのではありません。私たち一人ひとり、宣教のために主の招きを受け、その招きに応じて主と共に歩み、主の恵みを味わいながら生きる者として、今、ここに立たされています。伝道は主ご自身の御業です。私たちはその御業に招かれ、仕える恵みを与えられているのです。そのために、この体も、持ち物も、時間も、そして人生そのもの全てを含めて、既に主のものとしてされています。その歩みの中で、私たちは自分自身が“幸いな者として活かされていく”のです。

私たちの生活はイエス・キリストという真の光に照らされています。その光の前で自分自身を見詰め直すように招かれています。主が私たちに求められていること、それは「悔い改め」です。私たちは変えられていく必要があります。それは自分の力で自分を変えるのではなく、“主の御手によって向きを変えていただき、変えられていく”のです。これは、まだ洗礼を受けていない人だけに向けられた言葉ではありません。今日、この礼拝に集っている私たち一人ひとりに、今、改めて向けられている主の呼びかけであります。問われていることは、ただ一つのことです。“神が私たちの心と生活の中心にお

られるかどうか”、その一点です。“このお方を心の中心に据え、このお方へと向きを変えて生きること”、それが、「悔い改め」です。

しかし私たちは、知らず知らずのうちに周囲の状況や人の目、先の見えない不安に心を奪われてしまいます。本来、背負わなくてもよい重荷まで抱え込み、余計なことを気にし過ぎて心を擦り減らしてしまう者たちであります。キリストの命じられる「悔い改め」は、罪を悔いることに留まらず、“神の恵みに身を委ねて生きる方向転換”です。“自分中心の歩みから向きを変えよ！地上のことに心を奪われるな！ 神の方へと生きる向きをはっきり転換せよ！ 人生を神の下で新しく生きよ！”という招きです。それがキリストの呼びかけなのです。

15 節の最後に記されている「異邦人のガリラヤ」とは、“神から遠いと見做され、人々の目には価値のない場所とされていた地が、神の光の出発点とされた”という驚くべき告知であります。これは“声を失い、名も呼ばれないように生きていた者たちにも、神の光が差し込む”という希望の宣言です。「ガリラヤ」は過去の地名ではありません。それは今の私たちの生活の場、教会、家庭、職場、学校、日々の営みが淡々と繰り返される私たちが置かれた場所が、私たちにとっての「ガリラヤ」、伝道の拠点です。

「悔い改めよ。天の国は近づいた」、この御言葉が、この地において具体的に現われるのが“イエス・キリストの名によって献げられる礼拝”です。教会の命は礼拝にあります。神の御支配は主の日の礼拝において最も鮮やかに表されます。礼拝に集い、神を仰ぎ、賛美するとき、私たちは天の国の祝福がどのようなものであるかを実際に知る者とされるのです。礼拝において祝福を受けた者は、その恵みの中に留まるのではなく、この世へと遣わされ、この世に福音を証しする者とされるのです。

イエス・キリストがおられるところに「光」があります。教会はキリストという「光」を真直ぐに見上げて立ち、キリストの「光」に照らされ、生かされて歩む群れです。私たちの罪を贖うために十字架に架かり、復活されたキリストという「光」を見失うことなく、福音を宣べ伝える群れとして確かな一歩を踏み出して行きたいと願います。

お祈り致します。

聖なる神、この朝、あなたの御前に集い、共に礼拝を献げることを赦されている恵みを心から感謝致します。私たち、一人ひとりの歩みが、悔い改めと御言葉に聞き従うことから始められますように。どうか、あなたの語られる御言葉を私たちが深く受け止め、日々の糧として心に留めて巡らすことができますように。御言葉によって養われ、あなたのみ旨に生きる者として、この一年を歩ませてください。どうか私たちが、互に赦し合い、祈り合い、励まし合いながら、あなたの御言葉の宣教の業に誠実に励むことが赦されますように。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:402「いとむととき」

聖晩餐 使徒信条の告白 和解の挨拶

讃美歌:78「わが主よ、ここに集い」

献金・感謝(大隈道雄)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天にいらっしやいます父なる神さま、主の御降誕を覚えてから、あなたの御許に集まり、こうして、年の初めに、私たち、礼拝を献げることができましたことを感謝致します。

本日は、私たちがこの地にあつて 100 年以上の交わりと、また宣教と伝道の業に励んで来られた先達のことをも思い起こしながら、思いを新たに新しい道を歩む道を示されたと思います。感謝致します。どうか私たち兄弟姉妹、手を取り合い連帯して、あなたの御心に相応しい歩みを為す事が出来ますようにお導きください。

未だ見ぬこれから出会う方々、また私たちに連なる家族、兄弟姉妹、親友、知人含めて、どうかこの世が遍くあなたの光、御恵み与ることが出来ますように。どうか、この世から争い、妬み、あらゆる罪が取り除かれ、あなたに相応しい群れとして歩んでいくことができますように。

今献げましたものを、どうかあなたの御用のためにお使いください。

「主の祈り」を以て、これからの 1 週間の歩みを歩みたいと思います。

「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 90「主よ、来たり、祝したまえ」

派遣と祝福 (司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべし。 会衆:私がここにおります。私をお遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。)

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:(1)長老会から集会『ハラスメント研修会』の勧め。1/17(土)13:30-15:00 於信濃町教会、『教会はハラスメントがおこりやすいです』講師:平良愛香先生(神奈川教会ハラスメント防止委員・川和教会牧師)。(2)社会委員会:生活困窮者・ 仮釈放中の難民支援のための献品要請。(3)週報記載北支区新年礼拝:1/12月 於: 信濃町教会、昼食持参のこと。

後奏:「汝にこそ喜びあれ」(J.S.バッハ)